

# イヌワシの生態



## はじめに

白山地域では今までに約 140種の鳥類が記録されています。その中で最も大きく、力強く雄大な飛行をすることから、白山を象徴する鳥として知られているのがイヌワシです。昭和40年には躍進する石川のシンボルとして県鳥に制定されました。

この鳥は数が少なく、絶滅の恐れのあることから、国の天然記念物や、譲渡等が禁止されている特殊鳥類の指定をうけて保護されていますが、その生態については近年まで不明な点が多く残されていました。

石川県では、この鳥の生態を明らかにし、保護対策を検討するために、昭和52年度から調査を進めてきました。この小冊子では、その成果を中心に、イヌワシとはどんな鳥であるのかを紹介していきます。

# 目 次

## 分 類

イヌワシの特徴 .....	2
イヌワシの仲間 .....	3
白山地域のワシタカ類 .....	4

## 分 布

世界 .....	5
日本 .....	6
石川県内の分布と生息環境 .....	7

## 生息状況

個体数 .....	8
繁殖状況 .....	9
行動圏 .....	9

巣 .....	10
---------	----

餌 .....	11
---------	----

## 一年間の生活

繁殖期の始まり .....	12
産卵から孵化まで .....	13
雛の成長と行動 .....	14
巣立ち後 .....	18

イヌワシの保護 .....	19
---------------	----

県鳥20年のあゆみ .....	20
-----------------	----

# 分 類

イヌワシは分類上ワシタカ類に属する鳥の一種です。ワシタカ類は、これとフクロウ類を合わせて猛禽類とも呼ばれ、ほ乳類や鳥を捕まえ、これを食べる鳥たちの仲間です。ワシタカ類は世界中で約 290種、国内で29種が知られています。しかしこの中には、魚を主食とするミサゴや昆虫を食べるハチクマ、動物の死肉を専門に食べるハゲワシなどもあります。その中でイヌワシは最も力強く典型的な猛禽の一つです。

## イヌワシの特徴

### 〈体長と体重〉

嘴から尾羽の先端までの長さは80cm前後あり、両翼を広げた長さは約2mあります。雌の方が雄よりも全体的に大きく、2羽で飛行していると区別がつくほどです。体重は4kg前後です。

### 〈体 色〉

羽は全体的に黒褐色ですが、後頭部は黄褐色をおびています。幼鳥は成鳥よりも黒っぽく、翼と尾には帯状にはっきりした白色の羽があり、成長するとしだいに黒くなります。嘴は黒色で基部は黄色、足指は黄色です。

### 〈嘴と脚〉

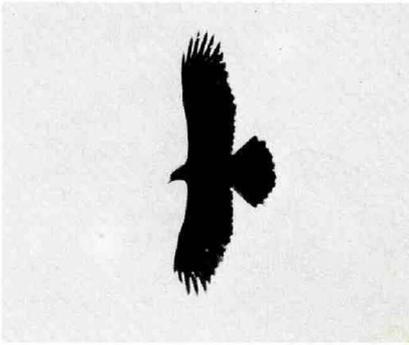
主に生きた動物を餌とするため、脚や嘴は餌を捕まえ、食べるために適応しています。脛まで羽で被われている脚には大きな爪のある指があり、これで獲物の急所につきたてたり首を脱臼させて殺します。嘴は太くてかぎ状になっており、これで獲物を小さく引き裂くようにして食べます。

### 〈寿 命〉

生まれて約4年で成鳥となり、自然界では普通10数年生きるといわれ



巣立ち直後の幼鳥



成 鳥



若 鳥

ていますが、最長記録としては、海外で標識調査の結果25年8か月がわかっています。飼育下では一般に長く生き、海外で48年、長野県で30年（大町山岳博物館）、県内では21年（小松芦城公園、現在小松市立博物館に剝製）の例があります。

#### 〈飛 行〉

上昇気流に乗って輪を描いて飛ぶ<sup>はんしょう</sup>帆翔と、羽ばたかずに直進する<sup>かっしょう</sup>滑翔が主なものですが、風のない時には羽ばたいて飛んだり、急降下するときなど翼をすばめて飛ぶこともあります。

#### イヌワシの仲間

イヌワシに近縁な鳥（イヌワシ属の鳥）は世界中に9種が知られています。日本ではイヌワシだけが繁殖していますが、ごく稀にカタジロワシとカラフトワシが記録されています。カタジロワシはスペイン、東ヨーロッパ、中央アジアの平野の森や草原にすんでいます。カラフトワシは東ヨーロッパから中国東北部にかけての、森の近くにある水辺にすんでいます。どちらも冬期は南方へ渡ります。アシナガワシは東ヨーロッパからトルコにかけてとインドの山の森林に主にすんでいて、ネズミなどの小型の動物を食べています。サメイロイヌワシ（ソウゲンワシ）はアフリカ、インド、中央アジアなどに広く分布しており、ほ乳類から昆虫まで大小さまざまな動物を捕まえ、死肉もよく食べます。コシジロイヌワシはアフリカの東部と南部の乾燥した岩山にすみ、イワダヌキを主食としています。コイヌワシは、アフリカのサバンナにすんでいて、トカゲや小型のヘビ、小型のほ乳類を主食としています。この他にオーストラリアにすみ、ウサギやワラビーを主食とするオナガイヌワシと、ニューギニアやモルッカ諸島にすむガーニイヌワシがいます。

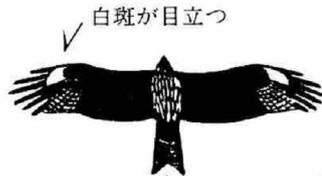
## 白山地域のワシタカ類

イヌワシの他に白山で記録されているワシタカ類に留鳥又は漂鳥としてトビ、オオタカ、ツミ、ハイタカ、ノスリ、クマタカ、チョウゲンボウが、夏鳥としてハチクマ、サシバがあります。また稀な冬鳥としてオジロワシ、迷鳥としてカタジロワシが記録されています。

これらの中で、イヌワシとの識別で特に注意を要するのはトビとクマタカです。トビは分布が広く、よく目にする鳥ですが、尾の形がばち状か、先端が内側へ切れこんでいるのが特徴となります。またクマタカは、白山ではイヌワシより標高の低いところにみられ、翼が白っぽいことや翼の後縁が大きくふくらんでいることが識別点となります。



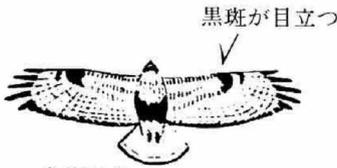
丸くくびれている クマタカ



白斑が目立つ

切れ込んでいる

トビ



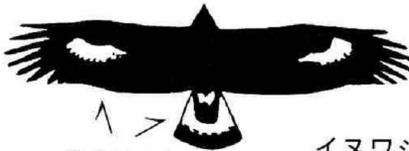
黒斑が目立つ

全体に白い

ノスリ



ハイタカ



幼鳥は白斑が目立つ

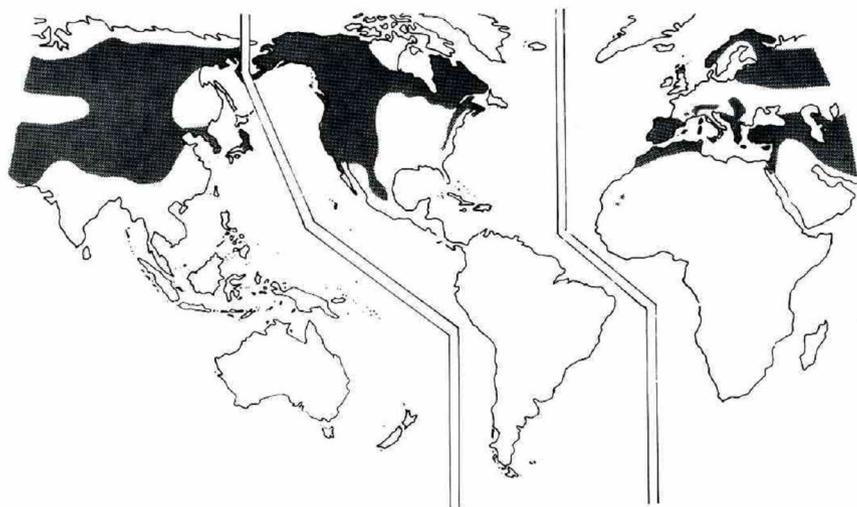
イヌワシ(若鳥)

(図はフィールドガイド「日本の野鳥」高野伸二著 日本野鳥の会発行より)

# 分 布

## 世 界

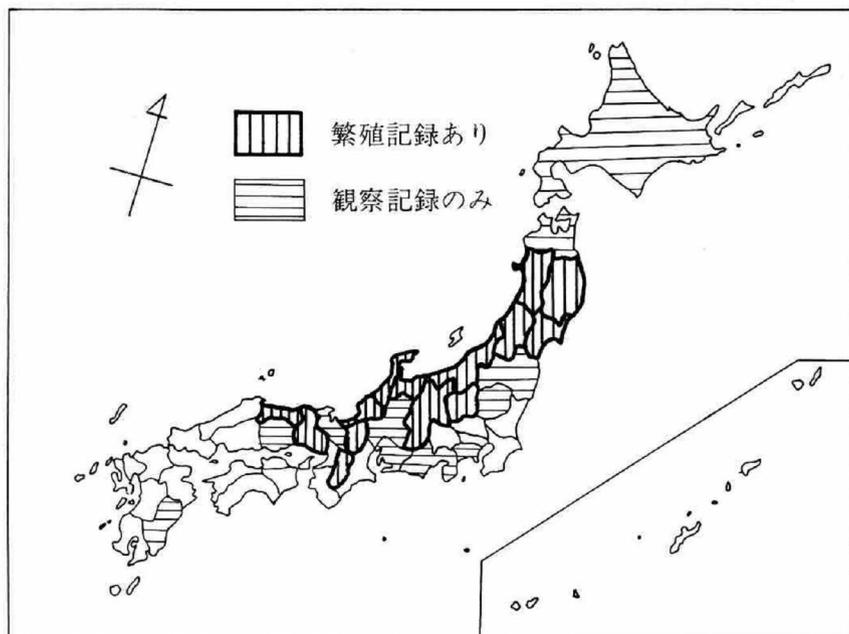
イヌワシ *Aquila chrysaetos* は、北半球の山岳地帯に広く分布しており、体の各部の羽色の若干のちがいや、大きさのちがいで5～6亜種に分類されています。ヨーロッパからシベリア西部には*A.c. chrysaetos* が、スペイン・北アフリカ・トルコなどには*A.c. homeyeri*、中国・インド北部などには*A.c. daphanea*、シベリア東部・北アメリカなどには*A.c. canadensis* が分布しています。日本と朝鮮半島に分布する*A.c. japonica* は、他に比べて小さく、尾羽の白っぽい斑紋などが特徴とされています。また学者によってはシベリア東部のものを*A.c. kamtschatica* として、北アメリカの*A.c. canadensis*と区別しています。一般には留鳥ですが、シベリア東部や北アメリカでは一部が渡りをします。



イヌワシの分布 (L.BROWN & D.AMADON 1968より)

## 日 本

少し前までは高山の鳥の代表のように思われ、中部山岳を始めとする山岳地帯の鳥とされていましたが、最近の調査では北海道から九州まで生息の記録があります。しかし繁殖が確認されているのは、東北地方から中国地方東部までの山地です。昭和56年～57年には岩手県から鳥取県までの14の県で繁殖が確認されています。



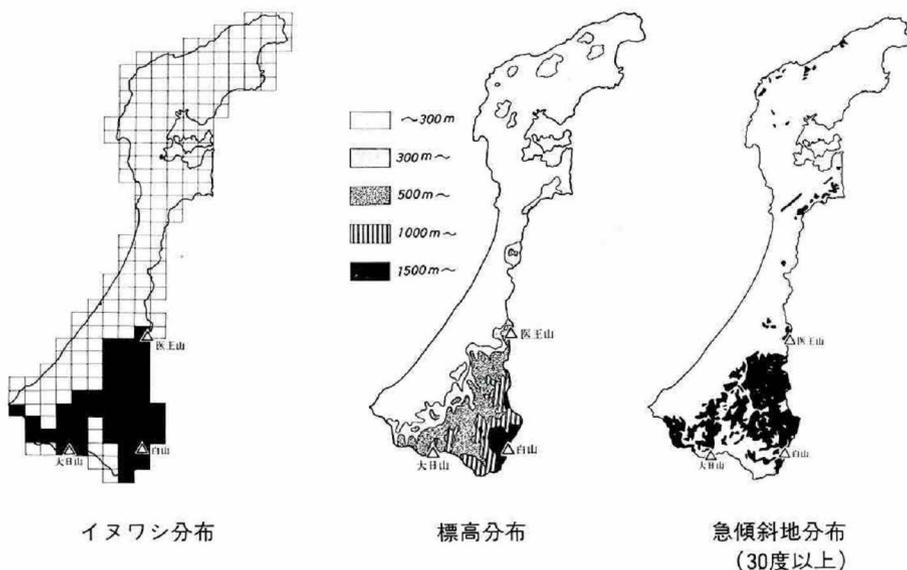
イヌワシの昭和56年～57年の分布（樋口・武田 1983を改変）

## 石川県内の分布と生息環境

以前は白山にだけしか生息しないように思われていたイヌワシは、近年の調査で県中南部の山地に広く分布していることが明らかとなりました。その範囲は白山を中心として、西は大日山付近、北は医王山付近にまで及んでいます。

イヌワシの分布と地形との関係を見てみると、図のように山地に広く分布していることがわかります。ただ県南部の一部には分布しないところがあります。この付近は山地ではあるものの、傾斜の比較的緩やかなところですが、また、標高が低く、山地や急傾斜地のままとりの少ない能登地域にも分布は知られていません。

イヌワシが生息するためには、豊富な餌<sup>えさ</sup>のある自然環境で狩りのしやすい開けた場所（白山では高基草原など）があること、外敵の近づけない急峻な場所で巣を造れる適当な岩場や大木があること、上昇気流が起こるなど飛行に適する風が吹く地形があることなどが条件となります。このような条件にあった白山地域では、深い大きな谷ごとに生息地が見つかっています。

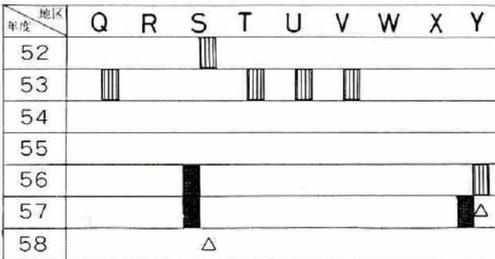
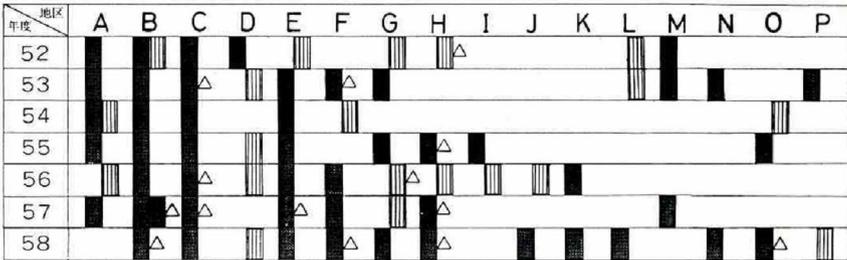


# 生息状況

## 個体数

過去の記録を含めると、今までに県内各地で20か所余りのイヌワシの生息地がわかっています。各々の地区での最近7年間の発見状況をまとめると図のようになります。ここでは番の2羽で見ているもの、単独のもの、幼鳥の出現を区別して示してあります。番が18地区、単独が4地区で見つかり、また番で見ている地区に、番と同時に単独個体が見つかったり、同時に別の2羽が見つかったこともあります。これらは、隣接する地区の個体や、定まった生息地をもたない単独の個体であると考えられます。

調査回数の少ない地区や、一度も調査の行なえなかった地区もありますが、一度番で見つかった地区は常に番であり、また単独個体の地区も番であると仮定するならば、少なくとも合計44羽となり、この地に幼鳥や定まった生息地をもたない個体がいることになります。



生息地別のイヌワシ発見状況

## 繁殖状況

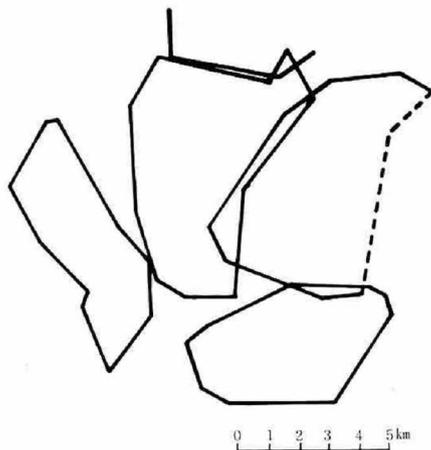
鳥島の調査が始まる以前に県内でイヌワシの繁殖が確認され、記録として残っているのは近年では昭和34年と昭和49年です。どちらも巣が見つかっており、前者では雛が2羽捕獲され、後者は巣立ちが確認されています。最近の調査では、前ページの図にみられる幼鳥の観察が、その地区での繁殖の確認に当たると考えられます。この中で実際に営巣が見つかっているのは昭和55年に1か所、昭和57年に1か所、昭和58年に3か所だけです。他の地区は夏から秋にかけて、その年に生まれた幼鳥が見つかったものです。

巣の見つかっている地区が少ないことや、続けて同じ巣を使うとは限らないこと、また繁殖期の多くが調査の困難な積雪期にあたることなどのため、繁殖状況は十分につかみにくいのが実状です。

## 行動圏

イヌワシが生活していくためには、営巣に適する場所があって、十分な餌の得られる自然環境が必要です。その広さを調べるために、番の行動を追跡し、その飛行コースを地図上に記録しました。そして書き込まれたコースの外まわりで囲まれた範囲を調べてみると、白山の4か所で17~31km<sup>2</sup>に及ぶことがわかりました。実際にはこれよりやや広い範囲を行動圏としていると考えられます。そして隣接する番との境界は、白山では主稜線であることが多く、その稜線で囲まれた大きな谷ごとに生息しているようです。

行動圏の広さは、地形や植生、餌の量、その地域に生息しているイヌワシの数などでちがってくると考えられます。兵庫・鳥取県境の氷ノ山周辺では、10番の平均として約64km<sup>2</sup>と計算されていますし、海外では1番当り23km<sup>2</sup> ~ 172km<sup>2</sup> などとさまざまな報告がされています。



白山地域のイヌワシ 4 番の行動圏

# 巢

巢は、主に深い谷にある切り立った岩壁や、急斜面にある常緑針葉樹の大木に造られます。そのような場所は外敵が近づけないことと、巢への出入りの際に都合がよいためと考えられます。

白山で知られているものは、昔、木に造られたといわれる1つを除いて全てが岩壁の巢です。上部がひさし状になって雨や雪、直射日光を防げるようになっている岩棚がほとんどです。大きさは約 150cm× 120cm くらいです。巢材となる木は周辺の植生に左右されますが、長さ 1 m 前後のブナやミズナラ、イタヤカエデなどの落葉した枝と、ヒノキ、スギ、マツ類などの青葉のある枝が主なものでした。巢の表面には、ススキの葉や茎、ヒノキの葉などのやわらかなものが敷かれています。

巢材は巢造りの時期だけでなく、<sup>ほうらん</sup>抱卵・<sup>いっすう</sup>育雛期を通じて運びこまれ、雛の巢立ち直前まで運ばれることがあります。産卵後に使う巢材は青葉のついた枝がほとんどです。

巢の数は番で1か所とは限りません。普通は数か所に持ってあり、その中のいずれかに産卵されます。白山のある番では4か所に巢が見つかっており、それ以外にもあると考えられる場所がわかっています。よく使われる巢は枝が厚く積み重ねられ、時には巢の天井の岩とのすき間が狭くなり、親の出入りが困難になるような場合もあります。



上部がひさし状になっている岩棚の巢

## えさ 餌

海外の報告には哺乳類から昆虫にいたるまでの 100種以上が餌として報告されていますが、主なものはウサギを中心とする哺乳類と、ライチョウなどの鳥類です。生きた動物だけでなく時には死肉も食べます。

日本ではノウサギ・ヤマドリ・アオダイショウなどが餌として多く利用されていますが、

テン・イタチ・リス・キツネ・サル・カモシカ・タヌキ・アナグマ・シカ・イヌ・ネコ・キジ・ライチョウ・カモ類・キジバト・

シマヘビ・ジムグリなども餌として記録されています。

白山の一つの巣に運ばれた餌の種類と数を表わしたのが表です。宮城県のある調査では、約 200例のうち80%以上がノウサギで占められているなど、日本ではノウサギが餌の多くを占めているようですが、白山ではヘビ類（大部分はアオダイショウ）が多いのが特徴です。しかし餌の種類や割合は、生息環境や季節が変われば変化すると考えられます。表は5月の調査で明らかになったもので、ヘビが冬眠している頃にはヤマドリやノウサギがこれに代わるものと考えられます。

餌は毛や皮、骨などの付いたままのみ込むことも多く、それらは消化されずに丸い固まり（ペリット）として吐き出されます。直接観察だけでなく、このようなペリットや骨など巣に残されたものを調べることもよっても餌の種類がわかります。

種 類	数 (%)
アオダイショウ	11 (35)
ヤマドリ	10 (32)
ノウサギ	5 (16)
ジムグリ	3 (10)
不 明	2 (7)

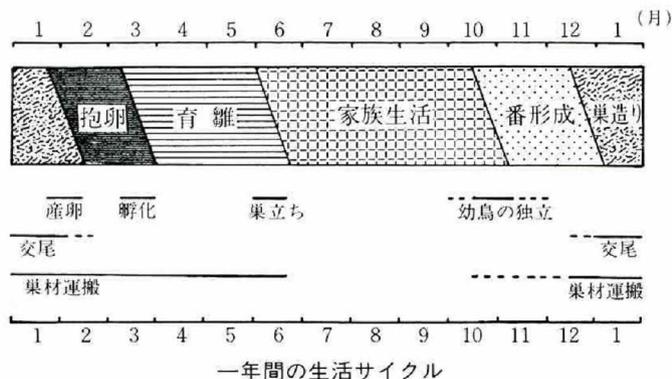
餌の種類と数(観察日数26日)



ペリット

# 一年間の生活

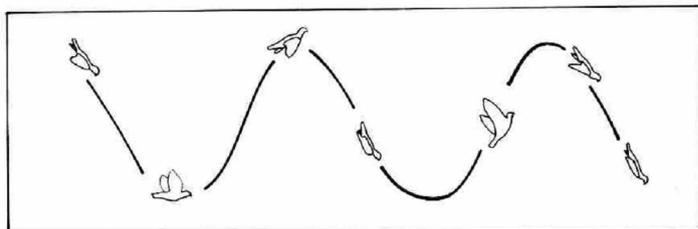
イヌワシは一度<sup>つがい</sup>番になると、どちらか一方が死ぬまでその関係が続けるといわれ、自分のナワバリを中心として一年中同じところで生活しています。多くの鳥の繁殖期間は春から夏にかけての数週間ですが、イヌワシは冬の初めに巣造りが始まり、雛が巣立つのは初夏の頃、さらに幼鳥が独立するのは秋になります。



## 繁殖期の始まり

10月から11月ころになると、番の2羽で飛行するのがよく見られるようになります。2羽が前後や左右、上下に並んで飛んだり、1羽が急下降、急上昇を繰り返しながら波打って飛ぶディスプレイ飛行がよく見られます。これは番の結びつきを強めたり、他のイヌワシなどの侵入者に対するナワバリ宣言の意味があります。そして時々巣材を運ぶのが見られることがあります。

本格的な巣造りは12月から1月ころで、日に何度も連続して運ぶことがあり、雌雄共に行ないます。そしてこの頃に木の上や岩の上で数回以上、交尾が行なわれます。



ディスプレイ飛行

## 産卵から孵化まで

白山では正確な産卵日は確認できていませんが、1月下旬から2月中旬頃の様です。産卵数は普通は2個で、1個や3個の場合も時々あります。親鳥は1卵を産むとすぐに抱卵に入り、3～5日後に次の卵を産みます。大きさは約75mm×59mm、重さは約120gで、



卵

白地に褐色の斑点が散らばっているものと、斑点がほとんどないものがあります。抱卵は主として雌によって行なわれ、雄は時々交代しますが、雌に餌を運んだり、巣の付近を警戒していることが多いようです。

雛がかえるのは3月中旬から下旬の頃で、抱卵日数は43～45日といわれています。白山では、3月28日と4月5日に、生まれて数日以内の灰白色の綿羽の雛がいるのが確かめられています。産卵日が3～5日間ずれるため、2卵以上の場合、第2卵の孵化もそれだけ遅くなります。餌が十分にあるなど条件がよければ雛は2羽とも育つことがありますが、普通は先に生まれて発育の進んだ方が後から生まれた雛をよく攻撃するため、後者が死亡し1羽しか育たないことが多いようです。白山でわかっている最近の巣立ちはすべて1羽です。また産まれた卵は全て孵化するとは限らず、中には無精卵であったり、途中で破損するものもあります。海外の報告には有機塩基系殺虫剤などによる汚染が原因でうまく孵化しない例が知られています。



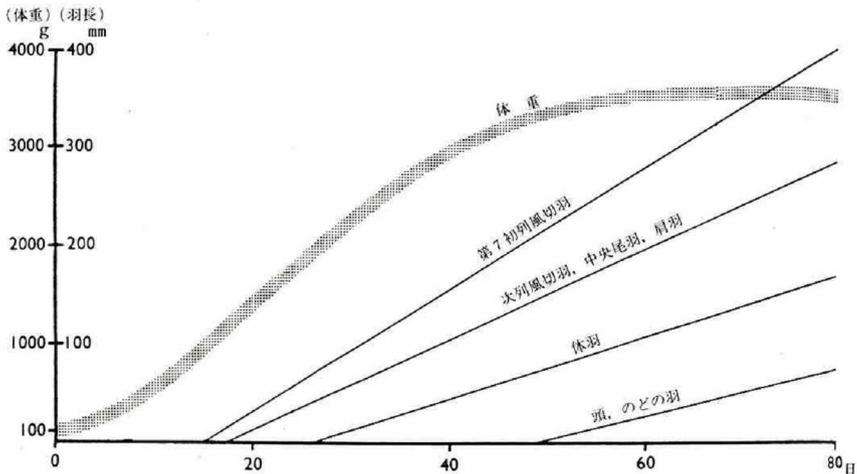
孵化直後の雛

## 雛の成長と行動

孵化後の雛の体重の増加は、下図のように最初徐々に進行し、日齢10日ごろから急速になり、50日くらいで進行がとまるといったS字カーブを描きます。羽色は、全身白色のものが、日齢30日くらいから日ごとに黒色の部分が増し、正常な発育をしておれば、羽色の変化で雛のだいたいの日齢がわかるくらいです。



(中条 他 1983より)



イヌワシ雛の体重と羽長の変化 (ELLIS 1979より)

雛は生まれてしばらくの間は、首がすわらず、立つこともできず、親鳥に抱かれていることが多いようです。初め灰白色であった綿羽はやがて真白になり、生まれて2週間もすると首がすわってきて、弱々しいながら羽繕い<sup>はづり</sup>や伸びなどの行動がみられます。やがて白い綿羽の中に、黒色の風切羽や尾羽がのび始め、嘴の基部や足指が灰色から黄色に変化します。



孵化後30日くらいになると、翼の縁や尾の先に黒色の羽がのびてきて、遠くからでもはっきりわかるようになります。この頃からは急速に黒色の羽が現われるようになり、それまでほとんど腹ばいか座るだけだったものが、しっかりと立つことができますようになります。そして巣に運ばれた餌を、親から口移しでもらうだけでなく自分でもついでに<sup>ごはし</sup>むことができるようになります。



- (上) 給餌 小さい頃は、親から肉の小片を口うつしに受けとる。  
(中) 脱糞 雛は立ち上って頭を下げ、尾をまっすぐに立てて、谷に向って糞をする。  
(下) 羽ばたき 巣立ちが近づくにしがって活発になり、多い時には1度に40回以上も連続して羽ばたく。





## 巣立ち後

巣立ち直後は、幼鳥は巣の近くにいて、木や岩にとまって羽繕い<sup>はつば</sup>や羽ばたきなど、巣にいる時と同様の行動をしています。白山で観察されたある例では、1週間くらいは巣を中心として約200mくらいの範囲の移動しかせず、飛ぶ回数もわずかでした。そして親鳥が運んでくる餌を待っているようです。この頃の幼鳥は、キャ・キャなどとよく鳴くので、姿が見えなくても居場所がわかります。



巣立ち後、林の中で休む幼鳥

またねぐらの場所がだいたい決まっているらしく、夕方には前日と同じ付近にいることが確かめられています。

巣立ち後3週間くらいになると、幼鳥は巣を中心として約1kmの範囲まで移動していました。時には親鳥が見守るように寄り添って飛ぶことがあります。そして日がたつにつれ、飛行能力が強くなり、移動範囲も広がっていきます。9～10月には親鳥と同じくらいの範囲を飛行しています。やがて自分で餌をとることもできるようになります。次の繁殖期の近づく10～11月になると、親鳥は時々幼鳥を攻撃し、追い払うような行動をとることがみられたりします。やがて幼鳥は親のナワバリから出て、独立していくのです。

巣立った幼鳥は、必ずしも順調に育たず、飛行や餌をとることがうまくできず死亡するものも多いと考えられます。新潟県や岩手県では、弱ったものが保護された例がよく知られていますが、その多くが幼鳥のようです。生後約4年で成鳥になりますが、巣立った幼鳥のうち、成鳥になるまでにその4分の3が死亡すると海外の報告にあります。



幼鳥の飛行

## イヌワシの保護

イヌワシは条件に恵まれると毎年続けて繁殖することもあります。産卵しても育たないことも多いようです。近年全国各地で少しずつ繁殖状況がわかってきましたが、無事巣立っていく例は少ないようです。

繁殖を妨げているものには餌の不足などもあるでしょうが、最も影響の大きいと考えられるのは、人による直接、間接の妨害でしょう。昔ならほとんど人の踏み込めなかった急峻な谷や奥地でも、近年は森林の伐採や林道や砂防工事が盛んに行なわれています。工事による営巣場所の直接的な破壊だけでなく、工事に伴う人の出入りや騒音が様々な形で繁殖に影響していると考えられます。特に巣造りから雛の誕生後しばらくまでの間は、ワシが最も警戒するので、この時期に何らかの妨害を受けると巣を放棄する危険性が高いのです。工事だけでなく、興味本位に巣に近づいて驚かしたり、保護鳥でありながら密猟されることもあるようです。山の中で伐採や工事が行なわれる時は、生息や営巣地の有無が事前に調査され、対策が講じられる必要があります。また営巣地を公表することを差し控えることも必要でしょう。

人の影響以外に、イヌワシ自身の原因で営巣できないこともあります。一度番をつくと、その場所で長年生活し、死亡してもまたそれに代る新しい個体が同じところを利用して、長年同じ巣が使用されることも多いのです。次から次へと巣材を積み重ねるため、岩棚の天井まで枝が詰まって出入りが困難になったり、巣の前面にツルや木が繁って使えなくなることがあります。また巣を造っている岩が崩れたり、木が枯れて壊れることもあります。

開発が進むにつれ、生息に適する自然が少なくなると共に、巣を造る場所も限られてくるようです。今後少なくともイヌワシを保護していくためには、生息地を静かに見守ってやるのが最も重要なことです。



ヤマドリを運ぶ親鳥

# 県鳥20年のあゆみ

イヌワシが県鳥に制定されたのは昭和40年のことで、それ以来何度か話題に取り上げられ、県民に親しまれてきました。制定の理由は「石川県を象徴する名山白山に常住する留鳥であり、翼開長2mの雄々しい姿、勇猛果敢な性格は県民に広大進取の気風を高め、県勢を全国に雄飛させるにふさわしい」でした。

年 月	主 な 内 容
昭和38年7月	石川野鳥の会より県へイヌワシを県鳥に制定する要望書が出される
昭和39年10月	県鳥獣審議会において県鳥をイヌワシとすることに決定される
昭和39年12月	県鳥の制定公告される(制定期日 昭和40年1月1日)
昭和40年5月	イヌワシが国の天然記念物に指定される
昭和47年11月	イヌワシが特殊鳥類(絶滅のおそれのある鳥類で、譲渡、輸出入等ができない)に指定される
昭和49年5月	高三郎山に親子3羽のいる巣が見つかる
昭和52年10月	県鳥保護調査事業始まる
昭和55年3月	「石川県におけるイヌワシの分布および個体数」白山自然保護センター研究報告書第6集発表
昭和55年5月	白山で営巣地が見つかり、約20日間の連続観察を行なう、雛1羽巣立つ
昭和56年10月	小松で飼育のイヌワシ死亡、これは昭和35年8月に小松市内で捕獲されたもの
昭和57年3月	「白山地域で発見されたイヌワシ幼鳥の育雛後期の行動」白山自然保護センター研究報告書第8集発表
昭和58年6月	3か所の営巣地で雛が無事巣立つのを確認
昭和58年7月	テーマ展「イヌワシの生態」の開催



親鳥 2 羽と雛

## あ と が き

今から30年ほど前までの白山麓では、いわゆる出作り生活などを行なっていて、現在よりもずっと奥地でも人々が暮らしていました。その頃、出作り地で飼っているネコがワシに捕られたり、子供は悪いことをするとワシにさらわれると脅かされたりしたようです。ある地区では黒鷲と呼んで知られていたように、かなり身近な存在だったことが想像されます。今では一般の人々の目にとまることの少なくなったイヌワシですが、昔と変わることなく山の中で生活しています。豊かな自然が保たれ、人間による妨害がない限りいつまでも生きていくことでしょう。コウノトリやトキの二の舞を演じることのないよう見守っていかねばなりません。

なお、この小冊子を書くに際して、日本イヌワシ研究会会員諸氏の報告を参考にさせていただいたことに感謝の意を表します。

---

白山の自然誌 4

### イヌワシの生態

発行日 昭和58年12月20日  
編集発行 石川県白山自然保護センター  
石川県石川郡吉野谷村木滑  
Tel. 07619-5-5321  
印刷 榎橋本確文堂

---

